

㉓

日本の詩歌

19

飯田蛇笏
水原秋桜子
山口誓子
中村草田男
荻原井泉水

中央公論社

丸山 薫
田中 冬二
立原 道造
田中 克己
蔵原伸二郎

昭和43年10月5日初版印刷

昭和43年10月15日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

丸山 薫

帆・ランプ・鷗

鶴の葬式

幼年

一日集

物象詩集

涙した神

点鐘鳴るところ

北国

9

16

23

29

36

44

46

56

仙境

花の芯

青春不在

連れ去られた海

田中冬二

青い夜道

海の見える石段

山鳴

花冷え

故園の歌

144

140

127

120

93

87

78

71

63

橡の黄葉

菽麦集

山の祭

春愁

晩春の日に

葡萄の女

立原道造

萱草に寄す

暁と夕の詩

優しき歌

205

191

177

173

163

161

158

156

152

未刊詩篇

220

田中克己

詩集西康省

253

大陸遠望

278

神軍

301

南の星

309

悲歌

314

藏原伸二郎

東洋の満月

325

暦日の鬼

乾いた道

岩魚

詩人の肖像

鑑賞

年譜

カット

340

351

367

大岡 信

阪本越郎

立原道造

棟方志功

丸山薰

帆・ランプ・鷗

河 口

船が錨をおろす。

船乗の心も錨をおろす。

鷗が淡水から、軋る帆索に挨拶する。

魚がビルジの孔に寄つてくる。

船長は潮風に染まつた服を着換へて上陸する。

夜がきても街から帰らなくなる。

もう船腹に牡蠣殻がいくつつふえたらう？

『帆・ランプ・鷗』は昭和七年十二月、丸山薫の処女詩集として第一書房から出版された。四六判小型、七二ページ、クリーム色表紙のフランス装、和紙刷五百部限定。新鮮な感じの瀟洒な詩集であった。作者は青年時代の一時期を東京高等商船学校に学んだことがあり、その記念として、練習船上の制服制帽姿の作者の写真一葉を挿入してあるのが、この詩集の雰囲気によく合致している。

収録詩三十四篇は、主に海洋の風物に題材を求め、作者が運命的に阻止された海へのノスタルジアを反映している。彼の得意とする擬人法的詩作法は巧みに詩人の孤独な心象を活動せしめ、その表現効果は、抒情詩としての新鮮な刺激を昭和初年の詩壇にもたらした。

「河口」 昭和七年『セルバン』五月号に発表。この詩は河口の港

夕暮が濃くなるたびに
息子の水夫がひとりで舳へさきに青いランプを灯ともす。

錨

船長がラム酒を飲んでゐる。

飲みながらなにか唄つてゐる。

唄うたは唄うたれてゆつくり滑車が帆索に回るやうに哀しい

鷗うが羽根音をひそめて舳ともの薄闇を囁ささやいて行つた。

舳やがて、河口に月が昇るのだらう。

船長の胸も赤いラム酒の満潮になつた。

その流れの底に

今宵も入墨の錨が青くゆらいでゐる。

の風景詩にとどまらないで、黄昏たそがれの港町の哀愁をにじませた一種独特の心象的抒情詩となっている。第一連の「錨をおろす」はリフレインの効果をあげて、海から帰った船乗りの心情を的確に表わし、詩に軽快なリズムを与えている。第二連の擬人法は薫の得意とする作詩法で、鷗や魚に、作者の帆船へのあこがれやなつかしさを託している。第三連は「服を着換へて上陸する」船長のダンディズムと、「夜がきても街から帰らなくなる」彼の港町での酔態と、「船腹に牡蠣殻がいくつふえたらう？」という詩句により、長い時間的経過を想わせる。終連、いつまでも父親の帰りを待ち続ける、若い息子のけなげさと悲しさを、「青いランプ」がよく表わしている。

「錨」 ここでは、船長の酔いと虚無的な孤独感の深さを即物的に

帆が歌つた

暗い海の中で羽搏はばたいてゐる鷗の羽根は、肩を回せば肩に触れさうだ。
だ。

暗い海の空に啼いてゐる鷗の声は、手を伸ばせば掌に掴つかめさうだ。
掴めさうで、だが姿の見えないのは、首に吊つるしたランプの瞬またたいて
ゐるせめだらう。

私はランプを吹き消さう。

そして消されたランプの燃殻のうへに鷗が来てとまるのを待たう。

ランプが歌つた

私の眼のとどかない闇深く海面に消えてゐる錨鎖。

写している。月が昇る河口の風景と、赤いラム酒の満潮とは対応し、酔った船長の胸に青くゆれる入墨の錨は、アンニエーの象徴となつて、虚無的な印象を深める。

この船長の姿には、作者の悲しみや海への郷愁が切なく反映され、無名時代の作者の倦怠の生活感情が示されていると思われる。「河口」「錨」は、一連の物語性を含み、エキゾティックなロマンティシズムに彩られた作品である。

「帆が歌つた」「ランプが歌つた」「鷗が歌つた」この三篇の作品は、昭和六年『セルバン』十二月号に発表当時評判になった作品で、三つは互いに内的連繫を保ち、複合されて「果たされない夢」という一つの主題をとらえている。原題は「帆の歌」「ランプの歌」「鷗の歌」。

作者の詩精神は海洋への郷愁か

私の眼のとどかない闇高くマストに逃げてゐる帆索。

私の光は乏しい。盲目の私の顔を照らしてゐるばかりだ。

私に見えない闇の遠くで私を贖めてゐる鷗が啼いた。

鷗が歌つた

私の姿は私自身にすら見えない。

ましてランプや、ランプに反射してゐる帆に見えようか？

だが私からランプと帆ははつきり見える。

凍えて遠く、私は闇を回るばかりだ。

離愁

錨の耳に鷗が囁いてゐる。

ら成り立ち、海への夢をはばまれた挫折感が、作者独特のレトリックによって、詩的映像となる。

「帆が歌つた」には、鷗をつかもうとしてつかめないもどかしさがあり、「ランプが歌つた」には、自分の光のためにかえて盲目にさせられた頼りなさがあり、「鷗が歌つた」には、帆やランプは見えていながら、自分は闇に隠れている苦しさを秘めている。それぞれかけ違った夢に傷ついているこうした悲しい心象風景には、作者の生活意識の深層における挫折感と虚脱感のいりまじった人生的な哀感がつきまとっている。

「昭和初頭に抬頭した『詩と詩論』を中心とする新詩精神の影響は、一応、自分の詩の形式の上に凝縮作用をおこさせ、それまでの情景主義のロマンティズムを心的に内向させた」（『自伝』創元社版『現代日本詩人全集』第十一卷）

不意に——言葉もなく錨が滑り落ちる。
驚いて鷗が離れる。

瞬間、錨は水に青ざめて沈んでゆく。

鷗の胸に残つた思ひが哀しい啼き声になつて空に散る。

砲 壘

破片は一つに寄り添はうとしてゐた。

亀裂はまた頬笑まうとしてゐた。

砲身は起き上つて、ふたたび砲架に坐らうとしてゐた。

みんな儂い原形を夢みてゐた。

ひと風ごとに、砂に埋れて行つた。

見えない海——候鳥の閃き。

と作者はいうが、薫の場合『詩と詩論』の影響はこれ以上に絶対に深まることになかった。というのは、この詩人には一定の生活意識があつて、詩的实践において、常にみずからの抒情についての発想の自覚があつたからである。

「離愁」昭和七年「セルバン」三月号に発表。この標題は錨（男性）と鷗（女性）の間に交される別離の哀愁をいう。鷗が錨に止ろうとするのを「錨の耳に鷗が囁いてゐる」と表わしたり、錨が「青ざめて沈んでゆく」という活物法的表現は、薫の得意なものである。この詩は、船上の作者が、錨に偶然一羽の鷗が飛来し、その時水夫が不意に錨を下しはじめたのを見た生活経験から発想したものである。詩では水夫を出さずに、錨と鷗とが出会う童話的世界とし、錨の落下と鷗の上昇によって、同

鶴

破れた羽根をひろげた鶴に

破れた羽根よりほかのながあらう。

破れた羽根を帆のやうに一杯に傾けて

鶴よ、風になにを防がうとしてゐるのだ。

アシカ

アシカは喉のどに笛を持つてゐる。凍えた潮あかの垢あかに詰つた笛を。不意に、蒸気の洩れる安全弁ベのやうにその笛が噎おれて鳴る。——とたんに岩から身を躍おらす。

アシカが鱗ひれを動かして行つた迹あとは、水面が暫くはアルコールのやうに撥はね合つて止まない。その波間からまだアシカが泳いでゐ

じ世界に在ることのできない両者の關係を巧みにとらえ、人間の離別の悲しみを暗示したのである。

薫の詩の世界は、こうした発想にユニークな新鮮さがあり、ロマネスクな味を感じさせる。

「砲壘ぱうるふ」昭和六年『詩神』一月号に発表。海岸の砂丘に今は毀れたまま放置されている砲壘が、刻刻砂に埋没されようとする状態を描いて、「情景はそのまま觀念的なある実体のようなものに転化している」(三好達治『現代詩講座』第三卷)もの悲しい心象風景である。ここでも擬人法を用い、人間の執念に託して「儚い原形」を夢みるという主題を明確にしている。しかし時はすでに遅い。ひと風ごとに砂に埋没していく悲しさ。虚無の運命には抗しかねた。郷愁の海はそこから見えなくて、わずかに空に候鳥の閃きのみが見える